

オーストラリア
ユニークスポット
ベスト10

マック近藤



皆さまこんにちは！！

初めまして。

オーストラリアはシドニー在住のMACと申します。

撮影の仕事をしています。

その関係で皆さまに少しだけ誇れるものがあるとしたら、地元の間にもあまり知られていないような場所に行き、様々な人々にあたりする機会が多いこと。

そんな経験から、普通にはあまり紹介されていない、「もう一つのオーストラリア」をちょっと書いてみました。勝手にベスト10と名うっていますが、格別な意味はありません。あくまでも、僕のそれぞれの場所への「思い入れ」のようなものだけです。

そんなことはともかく、気ままなエッセイです。

お時間がありましたら是非立ち寄ってみてください。

マック近藤



第10位 驚異のカニの大群 クリスマス島

いきなり、ちょっと変わったところからご紹介していきます。
まずは「クリスマス島」。

おしゃれな名前ですね。「そどこ？」って感じでしょうが、いちおう、オーストラリア（厳密に言うと、西オーストラリア州管轄）の島です。オーストラリアの地図で探しても見つかりません。その枠をはるかに超え、一番西のパスからさえ、もっとも一っと、北西のほうです。ここに行くには、パスから飛行機を乗りつないでいく方法もありますが、むしろ日本からだといンドネシア経由のほうが早いはず。

さて、この島何が有名だと思います？

近年は、オーストラリアへの難民（ボートピープル）の仮収容所として有名になっていますが、実は一年のある季節（雨季の初め、通常11月ごろ）になると、カニ（アカガニと呼ばれる）が、島の山や森から海に大移動。そして、海岸周辺で交尾、産卵をします、その数実に一億匹以上！！

日本からも、「世界びっくり・・・」、とか「仰天・・・」とかいった類の番組で、よくリサーチを頼まれます。

とにもかくにも、一目でわかるインパクトの高い一大イベントなのです。



そして僕も某番組で行ってきました、その「カニの大群を」を撮りに！

とにかく、とてつもなく不便なところ。日本からのスタッフはわずか2名のみ。時間的経済的に

考えて、日本側スタッフはインドネシア経由で来ることに。私はパース経由で、そして現地集合という段取り。

ただ、飛行機が確か1週間に1本か2本しかない。そのため日本側のスタッフに合わせたら、撮影はわずか3日で充分なところ、私だけ1週間も滞在するはめに。

またこの現象は、世界でもまれ。大雑把に雨季の初めといっても、実際にはいったいつになるのか、かなり予想が難しい。たしか、ある程度の雨が降って、そのあとの満月の後の何日か後・・・云々とか。

さんごの産卵などと同様、やはり自然のもの。時期を当てるのはかなりのギャンブル。そのため、事前の段取りも難しい。

ただこのときは、スタッフのおこないがよかったのか、予想通りでドンピシャ、ビンゴ（笑）、撮影もうまく行きました。

地元では、ずうっとこの研究をされているレンジャーの方に同行してもらいましたが、とにかくそのカニの数や凄まじいの一言。町周辺が「カニに覆われている」といっても大げさではないほど。

道路は、車が轢いてしまったカニの屍骸だらけ、悲惨な状態・・・それもかなり臭う！！いやはやなんとも。

ドライバーも注意はしているのですが、とにかく轢かないと前に進めない。むしろタイヤのパンクのほうも心配。

一般の家にもどンドン侵入してくる。もうみんな、毎年恒例のせいか、半ばあきらめ顔。

ゴルフ場に行ってみると、ここも一面、カニ、カニ、カニ。

もともとゴルフは嫌いではないほう、撮影が早く終わり暇つぶしにやってみましたが、ホールの穴にもカニさんが・・・。

ちょっと、ヒッチコックサスペンス映画の鳥が、カニに変わったよう！

それはそれは、大変なインパクトでした。

それと、もうひとつ面白いというか、思い出話が・・・これもかなりインパクトあります。

名前は忘れてしまいましたが、島で一番いいホテルに泊まることに。といってもほとんどチョイスはありませんでしたが（苦笑）。ただ、ここには「カジノ」が併設されていたのです。

もともとカジノは嫌いではないほう・・・、ちょっとだけ時間つぶしにやってみることに。まずはブラックジャックが好きなので、そちらのテーブルに・・・。でも、テーブル数も4つぐらい

しかない、まあ小さなところだからしょうがないか。いつものように\$5とか\$10チップに変えて、いざチャレンジ。

うん？、ところがどうも全体の雰囲気がおかしい。

何か、妙に落ち着いているというか・・・？

よく見ると、周りのお客さんの掛け金というか、チップが\$100とか、そんな数字なのです。

チップ1枚が1万円？、しかもそれを何十枚も一度で賭けている。

しばらくやっているうちに、あまりにも自分がみっともない、というか惨めったらしくなり、すぐごと部屋に戻り寝てしまいました。

あとで聞いてよくわかりましたが、近くのインドネシアとかマレーシアとか(詳しくは忘れませんでした)、そちらの国では合法的なギャンブルがあまりなく、お金持ちが週末とかに、ただカジノを楽しむためにやってくるそうです。しかも、なかには、チャーター便でくるような客層も。

(今ではどうなのか知りません・・・)

そんなところに1週間滞在してしまった。

そしてその後の僕・・・

甲殻類は比較的好きな方ですが、シドニーに戻ってからはしばらくは、カニを見るとあのなんともいえない臭いを思い出して吐きそうに・・・(これホントの話です、証人が何人もいます)。それと、後遺症で、カジノもしばらくはいけませんでしたが、まあ、こちらはむしろ、逆にいいことですけど。



「自然の神秘」、大変な島です、[島のホームページもあります\(英文\)](#)。
参考にどうぞ！(写真も同ホームページよりお借りしました)

第9位 世界一空気のおいしい島 タスマニア

ちょっとこのランキングで紹介するにはタスマニアというのはひとつの州だし、まあ、大きすぎる気もします。でも、やはりちょっと紹介したい気分。

この島は、日本やニュージーランドに近いと思います。

オーストラリア本土がどちらかというと、赤茶けた平坦な砂漠・・・というイメージに対し、ここは緑の濃い、起伏もある自然の豊かなところです。



そういえば、昔作家の畑正憲さんがここを随分気に入られ(「オーストラリア愛」という本も出している)、日本の北海道に対し、タスマニアを「南海道」と名づけていました。

確かに、似たような面積、緯度、そして環境、風土・・・さすが、作家さんほうまいことをいうなあと、感心したことを覚えています。

ただ個人的には、昔からタスマニアもいいところなんだろうけど、果たして日本人の旅行者にはどうなんだろう？というのがありました。

私見ですが、例えば、あるところに旅をする場合、何か「非日常」と言うか、普段味わえない

こと、場所、そんな体験をして、程よいカルチャーショックを味わうのが、旅の醍醐味だろうと思っていました。

そういう意味で、タスマニアは確かに自然が豊かなところかもしれないけども、こういった緑は、ある意味日本にもある。だから、日本人にはもっと非日常的な、例えば「砂漠」のほうが、興味があるのでは、そんな気がしていました。

でも、最近またタスマニアに出かける機会が多くなり、なぜか妙に心地いいんですね。「するめ」のようにとでもいうか、訪れるたびに徐々に徐々に味わいがでてくるような。

キャッチコピーではないですが、この島(州)は世界で一番空気がきれい(科学的に実証されています)、そして水がきれい。いまさらながらに、これってやっぱりすごいことなんだろうなと実感。

また最近流行の「エコ」なんてたいして考えなくても、この島で自然と遊んでいるだけで、無意識にそんなことを考えさせられます。僕みたいなぐうたら派には、ちょうどいいのかもしれない。

ただやはりその大自然も管理が大変。

この島には多くの「国立公園」、「世界遺産」がありますが、そういったところを取材していると、本当に当たり前なのですが、自然はほったらかしにしていたらやはり守れない・・・裏方さんたちの多くの努力が支えてくれるからこそ・・・だと思のです。

それも程よく、官民が一体になってがんばっているのを感じるのです。

こんなことはあまり若いうちは考えませんがね。

最近では日本でも、年配の方々の山登りがブームとか・・・。

オーストラリアで山歩きを楽しみたいのであれば、断然ここタスマニアでしょうね。

なかでも、クレードルマウンテンが一番の人気スポット。

ここの約1週間の縦断コースはホント、お勧めです。

「世界で一番空気と水がきれいなところ」・・・と言うのがなるほどと実感できるはず。

↓すばらしきクレードルマウンテン



余談ですが、いまや世界でも有名なカリスマシェフ、テツヤさん（シドニー在住）もタスマニアをべた褒めしています。特に彼の場合は、新鮮な「食材」という観点からやはりすごく実感していただろうと勝手に想像しています。

↓州都ホバート、しゃれたそしてこじんまりした町



↓こんな可愛いSIも走っている！



第8位 悠久のロマンを感じる マンゴ国立公園

”マンゴ国立公園”・・・実に不思議なところなんです。

そもそもここを知ったきっかけは、2005年に地元でこんな記事が、
「オーストラリアで457個もの、氷河期の人の足跡発見！」



自分的には「これなんだろう？」ということで、その時は頭の片隅に入り込んだ程度、まだ今ひとつピンと来ていませんでした。

ただ翌年すぐに日本の某番組から、「撮影できないか？」の依頼が・・・
そして、急遽調べてみることに。調べているうちに、これが面白い。
仕事ということを忘れて、僕自身にどんどんのめりこんでいってしまいました。

氷河期（約2万年前）の人類の足跡！
オーストラリアでも最古のもの！
しかもその足跡の数は今までで最大！

しかもしかも、先生方の分析では、当時のこの人たちの身長が2メートルぐらいあったとか、時速20キロで走っていたとか！

とにかく、ロマンですよ。このたぐいのはなしは夢があって、個人的にも大好き。

さっそく、関係各所にリサーチをかけてみると、中心人物の一人が、ボンド大学(ゴールドコースト)のステーブ・ウェブ教授と判明。彼に連絡をとってみると、全面的に協力してくれるという、ありがたいご返事。

(この先生、考古学の専門家だが、とにかくカッコいい、インディジョーンズのハリソンフォードばり。そのうえ紳士。もうすでに50歳を超えているのに、発掘作業のときは子供のように可愛いくなる)

ただ教授が言うには、現場は先住民アボリジニーの人たちの聖地。彼らの長老たちの許可を取らなくては行けない。このニュースが発表されて以来、まだ一度もマスコミは取材許可がおりていない、本音のところ、僕は協力したいが、取材は多分無理だろうとのこと。

僕もそうだろうな、とは思っていました。

実際アボリジニーの人たちは我々とは時間の概念からすべてが根本的に違います。

彼らの聖地、例えばウルルなどの取材の厳しさは、これまでにイヤというほど身に沁みて感じています。

ところが、ここで信じられないことが。

先方からOKが出たのです。報告してきてくれたウェブ教授ご自身が、まさに「信じられない！」と興奮気味。

うれしい知らせではありますが、どうしてOKを出してくれたのか？しかも、地元メディアをさておいて！

現場で長老たちとお会いして初めてわかったのですが、どうも、彼らは、むかしからの日本人(像)のことをどこで知ってか、日本人に対して非常に好意的な印象を持っていたよう。

「日本人はいい人たちだ、とても信用できる！」、

「だからむしろ最初のマスコミへの公開は、日本のメディアでやれば、私たちもうれしい」などと、こちらにとってはとてもありがたい、そして光栄なことを言ってくれました。

それで、世界でも初めてのマスコミ撮影が許されたのです。

(この最初のロケは2006年)

それだけに、撮影は慎重に、そして彼らのすべてに敬意を表しながら進めていきました。

ウェブ教授も、何年もかけて地元長老たちにとても溶け込んでいます、この姿勢頭が下がります。

業界話が長くなってしまいました。

残念ながら、まだ一般にはこの足跡は公開されていません。

非常に貴重なもので、荒らされたら大変なことになるので。

でも、そのレプリカを近く公開するそうです。(といっても2010年現在もまだのようです)

ここマンゴ国立公園は、行ってみるとわかりますが、いかにも・・・という感じの砂漠地帯。

近くの「WALL OF CHINA」と言う奇岩もなんとも妙。

地元のアボリジニーの人たちも、本当に親切で、人懐こかった！

とっても、シャイでかわいい。

撮影仕事も大変ですが、この仕事は本当にやらせていただき、「感謝」でした。

場所はシドニーから西（内陸）へ700キロ。

間違いなくかなり不便なところですよ・・・(笑)

↓ カッコいい、ウエブ教授



↓ 「WALL OF CHINA」と呼ばれる奇岩群。



↓ 2万年前の足跡



↓ 撮影スタッフの皆さん、おつかれさまでした。



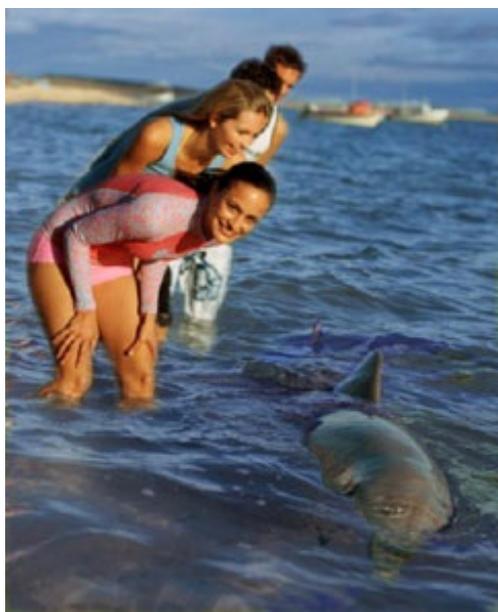
第7位 インド洋に浮かぶ夕日がお見事 モンキーマイアー

いまさらかもしれませんが、イルカは知能指数も高く、したがって人間の気持ちもわかるということで人気ですよ。事実、イルカセラピーなんてのもあり、けっこう人気だそうです。イルカと泳ぐと気持ちがよくなり、「癒し」につながるとか。

オーストラリアでも、イルカと間近に会えるところはいくつかあります。

シドニー北のポートスティブンスや、ブリスベン、ゴールドコーストに近いモートン島とか。

でも、やはり一番はこのモンキーマイアーかな。



ここに行くまでがとっても大変ですが(西のパーズから、飛行機で北上しても3時間ぐらいかかる)

、この途方もなくきれいなビーチにイルカがやってくるのです。そしてここで、レンジャーさんが立ち会って毎日餌付け。大きなお魚さんをあげるとイルカたちもとても喜ぶ。そうしているうちに、彼らも人懐っこくなり、徐々にビーチに寄り付くようになったそうです。

そして現在では毎日数回やってくるまでになり、観光地としても人気スポットに。また年間を通し、イルカに会える確率はほぼ100%に近い。たしか、1年を通しても見れない日はたった数日(二桁の日数にも満たない)とか。(まあ、そんななかで、貴重な時間と高いお金を払って行って、「超」不幸にも見られなかった人を個人的には2名知っていますが・・・もう笑ってあげるしかないですね)

またこの湾内には、普通はなかなか見られない、珍しいジュゴンもいる。そして、周辺には、地球上で始めて酸素を作った生物といわれるストロマトライトの群生地、ハメリンプール、延々110キロにも及ぶ、貝殻でできたその名もシェリービーチ(世界でも2箇所しかないらしい)など、大自然の見所も多い。

さらに(?)、この海はインド洋。

ちょうどこのインド洋に毎日、夕日が沈んでいくのです。

「東海岸」シドニーに住んでいる僕には、まあ、当たり前なのですが、海に沈む夕日に対する憧れが非常に強い。シドニーでは見られませんから。

というのは半分嘘で、これは僕の「職業病」のようなものかも。

実際、撮影のたびに、夕日スポットで夕日を撮るのはちょっとした、なんとというか「定番」。そのため、どこに撮影に行っても、常に「よさげな」夕日スポットを無意識に探しているのです、コーディネーターの悲しい習性・・・(笑)。

そんななかで、ここと(写真がないので紹介できないですが)、ダーウィンの夕日は格別です。

むかし、僕がこちらオーストラリアに来てほぼ一番最初に関わらせていただいた大きなプロジェクトに「オージーの風」と言うテレビ番組がありました。



(“オージーの風”撮影スタッフ ピナクルスで)

とにかく僕にはとても思い出深いもの。

スタッフ8名が2ヶ月かけてオーストラリアのほぼ全土を回ったのですが、最後に「どこが一番よかった？」と質問しあったら、全員がモンキーマイアーを支持！

何があるわけでもない、イルカも、まあ、そんなに興味のない人たちには、そんなに面白いものでもない（当たり前ですが）。でも、なんかやっぱりあの、空間、リゾート気分（と言って何も無い、くどいですが）、夕日・・・こんなものがとても我々と相性がよかったのか、あるいは、今思えば無意識に、旅の途中で疲れていたところを、イルカが「癒し」てくれたのかなあ？(ちょうど旅の真ん中ぐらいでした)

とにかくそんなところなのです、このモンキーマイアーは。

PS:おまけというわけではないですが、むかし、景山民夫さんが、「モンキー岬」という、いわゆる青春活劇(?)を書いています。面白かったですよ、ラウンドを考えているような若いワーホリの方なんかにはお勧めです。

↓地球の酸素の原点です（ストロマトライトの群生地）！



↓らくだにも乗れる



(写真はMonkey Mia Resortよりお借りしました)

第6位 動物の宝庫 カンガルー島

オーストラリアの動物は非常に独特で、コアラ、カンガルーなどをご存知の通り。

ほとんどが有袋類で、しかも夜行性。

マスコミで色々と紹介されていることもあり、皆さんオーストラリアにいらっしゃると、「野生のカンガルーやコアラを是非見てみたい」とおっしゃる方が多い。いや、一般の方のみならずマスコミの方にもかなり多い。

でも、実は「夜行性」ということもあり、コアラやカンガルーなどはほとんど野生では見れないのです。

もちろん動物園に行けば別ですが。

で、コンパクトにその野生の動物たちを近くで見られる一番お勧めのスポットがここカンガルー島です。



(愛くるしいアザラシたち、一日中寝転んでいる?)

ずいぶんむかしの話で恐縮ですが、まだ私が日本にいるとき(20年以上前)、映画監督の羽仁進さんが、テレビの特番でオーストラリアの動物ドキュメンタリーを撮られるとのこと。それで、1ヶ月ほどロケにいらっしゃいました。そのあとお会いして、「どこがよかったですか?」とお聞きしたところ、「カンガルー島が文句なしに一番面白かった」と言っていました。

大変前の話ですが、個人的にとっても印象に残っています。

それ以来カンガルー島は個人的にはずいぶんマークしています・・・(笑)。

場所は、南オーストラリア州の州都アデレードから飛行機(約1時間)か、陸路+フェリー(移動約半日)で。島自体は非常に大きく、オーストラリア本土を除いたらタスマニアに次ぐ2番目の大きさ。確か東京都の何倍もあったように記憶しています。

まあ、大きさはどうでもいいのですが、ここで見れるものを簡単に挙げてみても・・・

・アシカ、アザラシたちがビーチで寝そべっている。そしてそれを、間近で見ることができる。その数も多く、表情がなんとも愛くるしい。

・コアラが多い。オーストラリア全体では、現在コアラ自体は絶滅までいかないがその数がずいぶん減っている。ただこの島では逆にコアラにとっての天敵がないため、異常繁殖してしまい、一時は射殺すべきだと話題にもなった。今のところあまり有効な手だてがなく、メスコアラに避妊手術を施し一時的に凌いでいる状態。

・カンガルーはその島の冠の通り、まず間違いなくたくさんいます。しかし、なかなか見つからない(笑)。やはり、夜行性なので、日中は早朝か、夕方涼しくなる時間帯が狙い目。しかも野生のカンガルーは、とても臆病でシャイなため、我々を発見したとたん、すぐ逃げ去っていくのです、まあ、ちょっとなめられているかんじもしますが。

・カモノハシ。この不思議な動物は実はオーストラリアでは、コアラ以上にユニークで人気。オージーでも野生のカモノハシを見た人はほとんどいない。そんなカモノハシがこのクリーク(小川)に住んでいます。ただし、残念ながらほとんどチャンスは無し、よっぽど気合と忍耐をもって探るか、あるいは、ラッキーな場合だけ。

・ペンギン。夜になると、海で餌をとって来たペンギンたち(ここのペンギンはフェアリーペンギンといわれる小さな種)が海岸にある、自分たちの巣に戻ってくる。これまたその姿がなんとも愛くるしい。

・・・とまあ、数えたらきりが無いほど、楽しい動物たちに会えるチャンスがあります。そのうえ、けっこうでっかい砂丘、その名もリトルサハラ、とか、リマーカブルロックスと言った奇岩群も、面白いですね。

4WDの腕前があれば、現地でレンタカーを借りて楽しむ手もある。

いかがでしょう？

次のホリデーにでも考えてみたら・・・。





第5位 世界最南端の珊瑚礁 ロードハウ島

ここもあまり知られていないですが、本当にきれいな島です。
しかし、かなり不便。オーストラリア本土からは遠く離れています。



シドニーや、ブリスベンから東の方向に約700キロ、飛行機で2時間ぐらい。

長さ10キロ、幅が2キロと小さな島です。

かなり緯度は、高い（低い？）というか、ようするに赤道から離れ、むしろ南極に近づいているのですが、ここにあるのがロードハウ島。

なぜこの島が好きかというと、まあ、世界遺産でもあるのですが、すごく「やさしく」保護されているところです。僕も若い時は全然こんなことを考えてはいなかったのですが、今は、やはりそういう基準と言うかが妙に気にかかり始めています。

以前ご紹介した[タスマニア\(第8位\)](#)も同様です。

それはともかく。

「世界最南端のさんご礁」と言うだけあって、本当に海はきれいです。時間があれば、潜ったり、釣りをするのも楽しいはず。島には、野鳥もたくさん（あまり詳しくないですが）、確か「WOOD HEN」と言う、この島だけにしかいない絶滅種の鳥もいます。見た目はニワトリみたいで、でも飛べないらしい。。。

でも、ここにしかいないといわれると急に、いとおしい（見た目はなんでもない鳥だけど、くどい？）。

位置的にもちょうど暖流と寒流が交錯するところということで、世界でもこの周辺にしかいない魚やサンゴも多いそうです。

↓ここにしかいない飛べない鳥ウッドヘン



宿泊施設も限られ、1日に受け入れられる人数も完全にコントロールされているとか。あまり新たな開発も認められていないので、宿泊は1日400人まで、それ以上は実質的に入れない。早々、車はもちろんだめ。したがって普通は徒歩か、自転車を借りるのです。健康にもいい(笑)。

でも実際このくらいやらなくては自然は守れませんね。

先輩格のグレートバリアーリーフも、随分環境破壊が言われ始めています、つい最近の研究だとあと20年ぐらいでサンゴが死滅するかもしれないとも言われるご時世。

我々のすばらしい「共有財産」はやはり今後かなり厳しく守っていかないと無理なんでしょうね。

あとこの島は、ハイキングが気持ちいいです。

標高が850メートル。

そしてお隣にそびえたつのがボールズピラミッド。

相当な上級者のロッククライマーにはかなりチャレンジングな岩らしいですよ。

シドニーやブリスベンに来た方はついでに(といっても簡単ではありませんが)、足を延ばす感覚で検討してみてくださいはどうか？

↓ボールズピラミッド



写真など下記からお借りしました。

[さらに興味のある方はここにどうぞ。](#)

第4位 リゾートシティー シドニー

これは番外編のようなものですが、そしてシドニーを第2にの故郷とするものとして、完全に単なる「お国自慢」なのですが、・・・やはりどうしても紹介したいのでつつい。

皆さんも、ほとんど知ってる街、シドニー。

でも、この街いちおう、人口400万人のそれなりの大都会なのですが、単なる都会ではありません(笑)



僕の友人がうまいことを言ってました。

シドニーは「リゾートシティー」だって。

街中は世界中どこにでもあるような、いわゆる高層ビル群。ただこのすぐ前が雄大なるシドニー湾。

その友人も毎日優雅にフェリーで通勤しています(もっとも、フェリー通勤はここでは非常にポピュラー)

彼に言わせると、こんな400万の大都会なのに、30分程度行ったところにきれいなビーチが何十箇所もある。そしてこういったビーチ周辺に住んでも完全に通勤圏。

ビーチで泳ぐもよし、サーフィンをするもよし。

週末はヨットでシドニー湾は一杯になる。

釣りも盛ん、その友人も毎週でかける完全な「釣りバカ」。

僕の好きなゴルフも盛ん。街から1時間以内ぐらいにほぼ100箇所のゴルフ場がある。

夏は夏時間が採用され、夜8時ごろまで明るい。

したがって、仕事帰りにハーフぐらい楽しむのも充分可能。

あるいは、出勤前、朝6時ごろからハーフほど練習している「ゴルフバカ」もたくさん。僕の周りの日本人のなかにも、ちらほら。

こんなふうに都会ではあっても、すぐ近くに海と自然が一杯。

この環境のおかげで、少々仕事が忙しくても、かなり「癒されます」！

そして、シドニーのアイコンはなんと言ってもオペラハウスとハーバーブリッジ(オペラハウスは最近世界遺産になりました)。

僕も時々、ハーバーブリッジを渡り、街に出かけるのですが、そのたびにオペラハウスとシドニー湾が一望できる。いつもいつも、「ここに住んでいて幸せ」と実感する一瞬。いたって単純ですが・・・。

しかし、ここシドニーもこのところ超バブル。

不動産を中心として、諸物価がうなぎのぼり。

この点だけはいただけません。

日本のバブルの頃、司馬遼太郎さんも言っていました。

「土地は国民の共有財産。これを投機の対象にしたり、異常な値段に高騰させたり、そんな国はろくなもんじゃない！」

シドニーも早くなんとか、「正常」に戻ってほしいものです。

でもでも、

I LOVE SYDNEY!!!

(今回は完全なお国自慢になってしまい、、、失礼しました)

↓ヨットハーバー



↓街からわずか20分。ボンダイビーチ



↓シドニー湾から高層ビル群



第3位 地球のへそ ウルル+キングスキャニオン

ご存知のように、ここは「オーストラリアのへそ」とも「地球のへそ」とも言われています。オーストラリアでは、オペラハウス、グレートバリアリーフと並び、3大アイコンのひとつ。

↓カタジュタを望む夕日



↓ウルルの夕日



やはり何回行っても感動ですね、ウルルは！

エアーズロックは英語名、一般的にはまだまだこの名前のほうがなじみがあるかもしれません。でも、もともとは現地アボリジニーの土地だったところを、入植してきた白人が「勝手に」取り上げたもの。そして約20年前、元の所有者アボリジニーに返還され、彼らの呼び名である「ウルル」といわれるようになったのです。

したがって、僕も個人的には、「ウルル」という名称をできるだけ使いたいと思っています。

さてこの世界一大きな1枚岩、どうやってできたのだろう・・・？

もちろん科学的な説明はできるでしょうが、いざ現物を目の前にしてしまうと、ホント、神が、何らかの恣意で、あるいはいたずらで？、作ったとしか思えない神秘性のようなものを感じてしまいます。

体力に自信のある人はまずはこの山頂(岩頂?)に登ってみてください(片道約40分、かなり急な部分もあります)。何を感じるかはもちろん各人の自由。

でも、僕はこの360度地平線の広がる大パノラマ、ただただしばし呆然、無言、なんと言うか、言葉が幼稚ですが、「地球に抱かれているような・・・」そんな錯覚を持ってしまいます。

ただ、実はアボリジニーの人たちはこの聖地ウルルには、登って欲しくないのです。看板にも書いてあります。これまでも、「ついに登頂禁止か？」といった記事が、何度かマスコミで伝えられています。

しかし、彼らから見ても「背に腹は変えられない」部分があるのでしょうか。

まだ禁止には至っていませんが、登るとしても彼らの聖地に対し、敬意を示してほしいと思います。

そしてそのうえで、各人がご自分の”ウルル”を感じればいいわけですね。

↓いざ登頂！



↓登らないでくださいの看板が！

)

↓キングスキャニオン



↓撮影も命がけ？(崖と暑さで・・・)



第2位 日本人の勇気 木曜島

皆さん聞いたことあります、木曜島って？

オーストラリアの地図を見てもほとんど見つけれない、まず載っていないような小さなところ。

観光客に人気のスポット、ケアンズからさらに北上し、ケープヨーク(岬)の突端のまたさらに北にある小さな島、これが木曜島なのです。



実はこの島、我々日本人にとっては、とっても関わりの深いところです。

時代をさかのぼること、明治から昭和にかけて・・・そして第二次世界大戦までと続きます。

まだまだ日本の貧しい時代、そして「真珠貝」、「高瀬貝」がとても重宝がられた頃です。

当時ここ木曜島がその採取地として脚光を浴びていました。

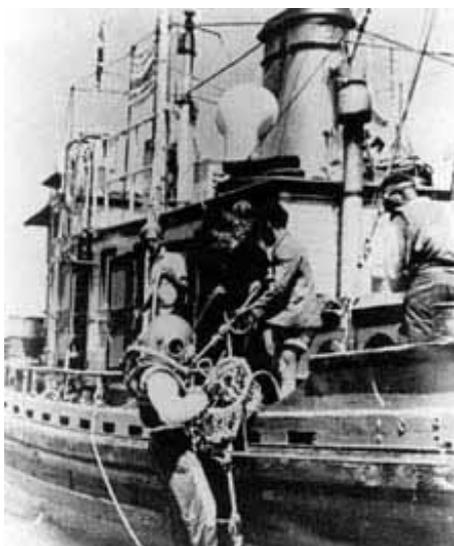
そのために、世界中のダイバーたちが、一攫千金を求めここにやってきたと言われていました。

そして、この日本人ダイバーたちが、まさに「オーストラリアにやってきた日本人」としてはほぼ一番最初なのです。(厳密に言うと、その少し前に、日本人サーカス団一行が来ていて・・・これはこれでまたとても興味のある話なのですが、それはさておき)

ただその当時はまだまだお粗末な採取方法。潜水技術も遅れていたし、当時のヘルメットを見ても恐ろしく大きく、そして重たい。

そのためか、潜水病になったりで、怪我人、死者が絶えない状態であったと聞きます。

(事実この海で、日本人ダイバー約700人の貴重な命が喪われたのです。)





各国から勇んできたダイバーたちも、そんな状況を目の当たりにし、「命あっての人生」、ホウホウのていで祖国に逃げ帰ったそうです。

そんななか、日本人の大半はそのまま、ここ木曜島に居残りがんばった。

どうも、「がんばる」精神は、日本人が根本的に持っている遺伝子、DNAのようなものかもしれません。

いちおう日本人の「後輩」としてはこの「勇気」、ぜひ引き継いでいきたいものです。

僕は、ここに1995年の戦後50周年企画で、某番組の取材でお邪魔して以来、ちょっとしたご縁で、何回か訪れる機会をえました。島では、「現役最後の日本人ダイバー」藤井さんも亡くなられ、当時のことを知る「生き証人」はいらっしゃらなくなってしまいましたが、でも、そのご子孫たちが元気に生活されています。

「RAINBOW HOTEL」はそんな藤井さんの娘さんの経営。

我々が訪れたときも非常に親切に対応いただきました。

子孫の日本人の方たちは島でローカルの方たちとご結婚された方たちもおおく、しかしとても遅く生きています。

島では、まだなんと「なまこ」なんかが残っていて（言葉としても）、日本人として、ついつい、うれしくなったりします。

そして、この島の隅っこにひっそりとあるのが、日本人墓地。

僕も訪れるたびに、お参りさせていただいています。

無縁仏も多く、ちょっと寂しい。手入れも大変で随分荒れつつある。

茂木ふみかさんという、もと読売新聞にお勤めの方が、ボランティアでこの墓地の維持に専念されていました。お会いしたのは、もう10年以上前。今頃どうされているんだろう？

当時は確かシドニーと神奈川の生活を半々にされていましたが・・・。

素敵な方でした。

また僕の尊敬する日本の「良心」司馬遼太郎さんの短編「木曜島の夜会」でも、ここの真珠ダイバーの物語が紹介されています。興味のある方はぜひご一読を。お勧めです。

島自体は車で一周わずか30分程度。

とにかく海が真っ青なのがとても印象的。

そういえば、隣の金曜島で、真珠の養殖をしている日本人の方がいます、高見さんといったかな？

取材のときにも大変お世話になりました。

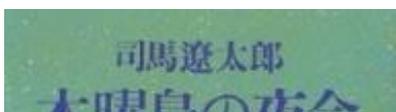
ここで、常時、アルバイトをしてくれる、若者を求めているように記憶します。

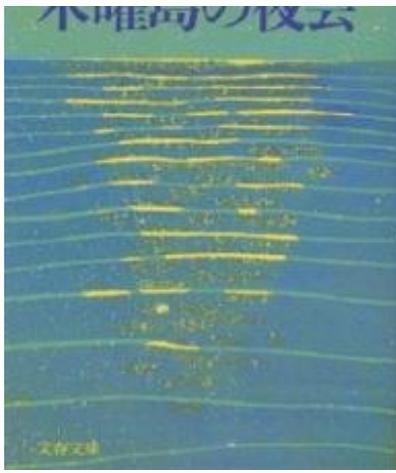
個人的には、ワーホリでオーストラリアに来ている若者には、つまらない(?) 都会に行くより、ずうっと楽しい、貴重な経験ができると思う。ここでアルバイトをしていた若者も、眼が輝いていた！

いいですよ、素朴で、野性っぽくって。

僕たちのような永住者にとってはいわば彼らは先達。頭が下がります。

日本人の「先輩」たちに、感謝です！





第1位 地下で眠る町 クーパーペディー

さて勝手に自分で考える、思い出深い場所No.1は・・・・・・・・

やはりなんと言ってもクーパーペディーです。



ここをなんと表現したらよいのやら・・・とにかく変わったところ。世界でもこんなところはホントに稀じゃないかと思います。

まずはアクセス。比較的行きやすいのは、南オーストラリア州の州都アデレードから小さなセスナで約2時間（トイレもないので要注意!）。といっても、まずアデレードまで行くのが大変かもしれません。

まあアデレードまで行くのなら、せっかくならワイン(オーストラリアーのワイン生産地バロッサバレー)と動物(オーストラリアーの動物の宝庫、[カンガルー島](#))も一緒に楽しんでしまうのがいいでしょう。

あるいは、アデレード～ダーウィンの縦断ルートに入っていますから、このルートをチャレンジする際に寄るのもいいかもしれません。

さてクーパーペディーですが、まずはどんなところかをご説明しましょう。

ものの案内によると、人口わずか3500人の小さな町、しかし住民は世界45カ国から来ているといわれています。そして世界のオパールの実に75%はここで採れるとのこと!

そうです、オパールの大生産地なのです。

しかしこの町の面白いところは色々。

私の実感としてはまずは何といっても・・・暑い!

冬場はまだしも、夏の暑さは半端ではありません。40度になるのはざら、50度を記録することもあるとか。

鳥が焼き鳥になって落ちてくるという痛いジョークも・・・。

そのため、真夏の数ヶ月は、町の人口はほぼ半分になり、多くは別な場所に疎開（笑）、「避暑」を兼ねて逃げてしまうんです。雨もほとんど降らない。事実、私が何回か訪れたときも、1週間ほどいても雲ひとつなかった日々が続きました。地元のコーディネーターに聞いたら、「雲ひとつない天気」が実に1ヶ月以上続いたこともあるそうな、恐るべき天気！！

さて、そんな風土で暮らしていくために、人々は賢い生活スタイルを築き上げました。

地下に穴を掘りそこを「家」としたのです。

地上がいくら暑くても、また寒くても（事実、砂漠性の気候のため冬の夜間は逆にかなり冷える）、地下の温度は1年中17度（しかも朝も夜も一定している）にキープ、実に快適。

そのため、一般の家に限らず、ホテル、お店、そして教会でさえも地下にあるのです。なぜ1年中同じ温度にキープされているのか???地元の人に聞いてもわかりません・・・自然の力ですね。

車で町の周辺を走ってみると、穴ぼこだらけ（鉱山）の光景が！そう、まるで月面のよう・・・

こんなロケーションのせいか、「マッドマックス」をはじめ多くの映画のロケもたびたび行われているのです。

また、すごい(というか怖い!)のは、鉱山の穴が多いので、その「穴に注意！」の看板があちこちにあること。



冗談ではなく、ここを訪れて行方不明になってしまった旅行者も少なからずいるのです。これは自分たちで行ってみるとよくわかるのですが、あまりの不思議な光景に思わず写真を撮りたくなってしまいます、まるで魅入られたように！そしてカメラに集中しているあまり、無意識に後ずさりしたりして、意外なところに穴があったり(恐)・・・こんなことが十分ありうるのです。事実、町の交番(ポリス)の前には行方不明者の顔と写真が常時数名掲げられています。

そういったことにも気をつけながら(!?)、観光で来たときは、ぜひ穴倉の地下ホテルで寝てみるといいでしょう。最初は何か違和感というか、圧迫感のようなものがあるかもしれませんが

、いかに快適かよくわかります。

また、時間があれば面白い（かもしれない）のはゴルフ。場所柄ほとんどがバンカーかラフだけのようなところ。サンドウエッジとパタ2本で足ります。しかし自分のクラブは使わないほうがいいかも・・・多分すぐ使い物にならなくなります(笑)。夏は、日中は暑すぎるので、「光るボール」でナイターをするのがお勧め。ナイターができるゴルフ場はオーストラリアでもここぐらいしかありません。

この周辺にも非常に面白いところ、見所がたくさんあります。

確か人間が作ったものでは最長のフェンス（ディンゴフェンス、5300キロ）なんてものもあったな～！

ううん、ここの不思議さはうまく説明できません。やっぱり百聞は一見にしかずです、ぜひ行って見て下さい。

変な話、損はしないと思いますよ！

ただし決して「快適」な旅ができるところではありません、十分な「カルチャーショック」を楽しめるところと表現したらいいでしょうか？

その点はくれぐれも誤解のないよう、あとで文句を言われても私は責任はもてませんので・・・笑。

↓バンカーだらけ？のゴルフ場



↓ゲッコー



↓地下ホテル



オーストラリアユニークスポット ベスト10

<http://p.booklog.jp/book/40383>

著者 : ozmac

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ozmac/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40383>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40383>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.